

もし潮田渚が色々チート  
だったらどうなるか

紗也

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ほぼ、タイトルに書いてある通りです。

潮田渚はいろんな意味で天才児だ。しかし、何故か彼は自分が天才児である事をひた隠しにしていた。

そんな彼が織りなす物語をどうぞご覧あれ。

渚とあかり（カエデ）は義姉妹で血は繋がってない。

渚とあかり（カエデ）は殺し屋。

渚の父親はあぐりと再婚。

なるべく更新していく予定です。文の構成とか、おかしな所が多いと思います。それがダメと言う人は、ブラウザバックしてください。

# 目次

キャラ設定 | 1

1話 | プロローグ | 9

2話 | この人(?)って本当に教

師か? | 14

3話 | 先生、ド怒りの時間 | 18

4話 | 日常の時間 | 26

5話 | ハンデイキヤップの時間

32

6話 | 素行不良生の時間 | 39

7話 | 素行不良生の時間 | part

2 | | 45

8話 | ハニトラの達人の時間 | 52

9話 | 毒薬の時間 | 57

10話 | 全校集会の時間 | 65

11話 | 中間テストの時間 | 72

12話 | テスト返しの時間 | 81

13話 | 修学旅行迄の時間 | 85

14話 | 修学旅行の1日目 | 90

## キャラ設定

潮田渚しおたなぎさ

（現：雪村渚、芸名：塩野秋）

女の子しおのあき

4歳から感情の起伏が読み取れる。

年中（5歳）の頃に両親が離婚。父親の方について行った。

離婚の理由：渚が、男の子じゃないから。

そして、小さい頃の記憶を鮮明に覚えているから。

その事などの所為で人間不信になり、家族と数人にしか心を開いていない。

6歳から暗殺業をしている。

コードネームは『ナギ』。

仕事以外でもナイフは持っている。

頭脳の方はIQ200位あり、運動神経も抜群！

大抵の事は人並み以上にこなせるが、特に、楽器演奏（特にピアノ、ギター、バイオリン）が得意。

中性的な顔立ちなので、普段は男装している（演技力を鍛える為にも）。

暗殺の時も大体が男装して殺る。

髪の毛はウィッグで、本当は腰ぐらゐまである黒髪。(暗殺や変装用のいろんな色や髪型のウィッグと伊達メガネを持つている。)

だが、何時もは勉強はダメで、運動神経があまり無いという様な原作に忠実な性格を演じている。

両親が離婚してから父親があぐりと再婚し、あかりと義姉妹になった。あかりのことは、姉妹として好き。

元子役『塩野秋』<sup>しおのあき</sup>で、磨瀬榛名こと雪村あかりと共に『2大天才子役』と呼ばれていた。

浅野学秀は、幼馴染で好きな人。

普段は、『しゅう』と呼ぶが、学校では、『浅野くん』と呼ぶ。

烏間先生は、格闘技術を教えてくれる先生。学校でも『烏間先生』と呼ぶ。

家で話す時は大抵『・・・』が最初に付く。

渚の父親現：雪村秋斗 (元潮田秋斗<sup>しおたあきと</sup>)

元暗殺者で、渚が生まれ足を洗う。

渚に暗殺の才能があると分かると、手取り足取り自分の持つているスキルを渚に教える。今は、防衛省で働いていて、烏間の上司。

裏では、渚たちのサポートをしている。

離婚してスグにあぐり達を引き取る。

娘達をすごく愛している。♀ 親バカ。

浅野学峯とは、結構仲がいい。

あぐりとは、幼馴染で元々恋愛的に好きだった。

茅野カエデ (本名：雪村あかり) 芸名：磨瀬榛名ませはるな

元子役『磨瀬榛名』で、塩野秋こと潮田渚と共に『2大天才子役』と呼ばれていた。

母である「雪村あぐり」が、渚の父親と結婚して渚と義姉妹になる。渚の事は、姉妹

として好き。

渚の父親に、暗殺のスキルを教えてもらっている。コードネームは「レッド」。

初めて人を殺したのは、6歳の時。

カルマ並みに、頭は良い。運動神経は暗殺業をしている為か、凄くいい。

だが、何時もは勉強はE組の中ではまずまずで、運動はあまり得意じゃないという演技をしている。

浅野学秀とは、幼馴染。

普段は『学秀くん』と呼び、学校では『浅野くん』と呼ぶ。

烏間先生に、格闘技術を教えてもらっていて、学校でも『烏間先生』と呼んでいる。

あさのがくしゆう  
浅野学秀

カエデと渚の幼馴染で、渚の事が異性として好き。

学年首席で、櫛ヶ丘学園理事長の息子。

幼なじみの前や、家だとキャラが全然違う。

今の悩み：テストで渚とカエデが本気を出してくれない事（勝負にならない

学校で他人行儀で話される事。

渚のお陰で、原作よりも少しだけ頭が良い。偶に、渚たちの仕事を手伝っているので、

暗殺技術は高い。コードネームは『シユウ』

学校では、渚やカエデと親しくしないようにしながらも、A組に入れる方法を探している。

I Q 180ぐらい（独自解釈です。）

あさのがくほう  
浅野學峯

渚たちの父親の雪村秋斗と仲が良い。渚の事を特に気に入っている。理由は、

・難関大学の入試問題を難なく解いたから。



・礼儀正しいから。

・チエスでタメを張れるぐらい強かったから。

カエデの事も渚ほどではないが気に入っている。

渚とカエデが殺し屋なのは知っているし、学秀が偶にそれを手伝っているのも知っている。秋斗が元殺し屋なのも勿論知っている。渚以上のチート。

偶に、渚たちに格闘技を教えている。

渚と、あかりのことは、『さん』付で呼ぶ。

殺せんせー

月を破壊した犯人。来年には、地球も壊すと言った化物。モンスター元殺し屋で、その時のコー

ドネームは「死神」（コレはまだ誰にも言っていない。）

からすまただおみ  
鳥間惟臣

翌年3月に地球を爆破させると予告して柗ヶ丘中学校3年E組の教師となった謎の生命体殺せんせーを監視する防衛省臨時特務部所属の男性である。

自らも教員免許を持っており、3年E組の副担任となった。担当科目は体育で、授業ではナイフや銃の扱いかたを教え、生徒たちの暗殺活動に役立てている。

仏頂面で常に厳しい表情をしているが、整った容姿をしているため女生徒からは

「カッコいい」と評されている。

殺せんせーの暗殺の任務が最優先ながらも、生徒たちにはなるべく普通の学生生活を送ってもらいたいと考えており、国からの命令とE組の環境との板挟みになることもある。新しく英語の教師となったイリーナ・イエラビッチの奔放な態度に頭が痛いばかりの苦労性である。

犬好きであるが、犬の前を通ると死にもの狂いで吠えられる。

渚の父親こと雪村秋斗の部下。渚とあかりのことは、秋斗がよく話すので知っている。よく渚とあかりに格闘技術を教えている。渚たちが殺し屋だと言うことは知っている。

渚、あかりのことは呼び捨てで呼ぶ。

イリーナ・イエラビッチ

殺せんせーを殺しに来た殺し屋。渚とあかりのことは、暗殺の時に会った事がある。ハニートランプを使う殺し屋の中では1位の実力者。後は、原作どうり。

E組

大体原作どうり

『暗殺の時』

潮田渚

コードネームは《ナギ》。

ハニートラップも得意で、ピッチ先生とタメを張るぐらい。1番得意なのは中遠距離暗殺。

武器は、ナイフ2本（あまり使わない）と、拳銃が2丁（S & amp; W M10）、スナイパーライフル（PGM ヘカートII）、ワイヤー、毒（自家製）スタンガンなど色々持っている。暗殺時は、黒のパーカーでフードを深く被っていて、紺色の長ズボンを履いている。メガネは外していて、緑色のカラコンに赤色ポニーテールのウィッグをつけている。

ハニートラの時の服装と名前

名前は、せつな雪雫。

ターゲットのタイプによって服装や髪型を変えるが、大体は原作の渚君が女装した時の服装に茶色ロングヘアのウィッグをつけている。

茅野カエデ

コードネームは《レッド》。

ハニートラップは、人並みにはできるがあまり得意ではない。1番得意なのは、近接

暗殺。

武器は、ナイフ7本と、拳銃（S & a m p ; W M 1 0）とワイヤー、毒（渚が作った）、スタンガンなどいろいろ持っている。

服装は、渚と同じ。

浅野学秀

コードネームは《シユウ》。

武器は、ナイフ5本と、拳銃（ナガンM1895）とスナイパーライフル（FR—F2）、ピアノ線、スタンガン、などいろいろ持っている。

## 1話 プロローグ

渚 side

「潮田渚、職員室に來い。」

〈職員室〉

「お前は、E組に移行される事になった。お前の所為で、俺の評価まで下がっちゃったじゃねーか。」

やっとこの時が來た。僕は必死に笑いを堪える。

「わかりました。先生、楽しかったですよ。ずっと騙され続けてくれてありがとうございます。」

「な、なんだと。」（俺を騙していた、だ、と!?）

〈教室で〉

“E組への移行をおしらせします。”

そう書かれた通知書をテストの結果の代わりに渡された。

まあ、そうなるかと確信してたよ。E組に墮ちるなんてさ。まあ、教師もクラスメイトも、よく気づかなかったと思うよ。僕がE組に墮ちる様に演技してたとい

う事を。

もう周りにはこの事は広がったか。これのおかげで、僕らも今以上には自由に動けるようになるかなあ？

クラスメイト曰く

「死んでも、E組に堕ちたくない」

「E組に堕ちるぐらいなら死んだ方がまし」

らしい。

死んだ方がましなら、死ねばいいのに。俺よりもお前らの方がバカなのにさ。

僕たちが通う偏差値66の難関名門中学、柵ヶ丘中学校は、AとD迄のクラスが本校舎にある。

だが本校舎から離れた森の中に、1つの古びた校舎がある。その校舎にあるクラスの事を本校舎の奴らは————endのE組と呼ぶ。

素行が悪い生徒、

勉強に付いていけなくなった生徒などが担任によって容赦なく押し込まれる。

それに、AとD組の生徒から後ろ指を指され、罵倒暴言されながら学校生活を送らなければならない。

元のクラスに戻るには、とても良い成績を取らなければならない。

というような、絶望感溢れるクラスだ。

なら何故、僕がそんな絶望感溢れるクラスに行こうとしているのか疑問に思う人も  
いるだろう。

それには3つの理由がある。

1つ目は、めぐり姉が居るからだ。↑シスコンじゃないから。この人だけはキチンと  
自分を見てくれるからだよ。って誰に説明してるんだろ？

2つ目は、このクラスには、自分の事をキチンと見てくれる人が居ないから。

3つ目は、A組にだけは行きたくないから。

\*

く渚たちの家でく

渚「・・・ただいま。」

めぐり「E組になったんだらうなあ

めぐり「お帰りなさい。結果はどうだった？」

渚「・・・E組に墮とされた。」

めぐり「だと思った。まあ、これからは学校でもよろしくね、渚。」

そういえばめぐり姉さん、E組の教師になったんだっけ？

渚「うん、よろしくね、めぐり姉。」

渚「・・・あかりとお父さんは？」

めぐり「あかりは仕事だよ。もう少ししたら、帰ってくると思う。お父さんは、夜勤だつて。」

あかりの仕事というのは、女優だ。僕とあかりは、小さい頃子役をしていた。そういうえ、天才子役つて言われてたなあ。今は、ウィッグをつけてバレないようになった。

僕は学校の校則で『アルバイト禁止』つてなつてるので、今は休業中。あかりはアルバイトOKの学校に行ったので、女優業を続けている。

あかり「ただいま〜」

あかりが帰ってきた。

渚・めぐり「（・・・）お帰り〜」

めぐり「あかりも帰って来たし、ご飯食べよつか。」

僕たちがご飯を食べている時に、あかりが唐突に言い出した。

あかり「私、櫛ヶ丘に行く。」

渚「・・・わかった。：つて、えっ！今なんて？」

急にあかりが変な事を言いましたぞ。



あかり「だ・か・ら・櫛ヶ丘中学校に編入するの。」

なんで、よりにもよってうちの学校？

渚「・・・なんで？」

あかり「だって、お姉ちゃんと渚は同じ学校じゃん。私だけ仲間はずれなのは、イヤ。」  
ああ、ヤキモチね。

渚「・・・確かに、仲間はずれ。けど、女優業はどうするの？うちの学校、『バイト禁止』」

あかり「ん〜。学業を優先させるって理由で休業する。」

そう来たか。

あぐり「いいんじゃない？」

あかり「ほんと〜？」

あぐり「うん。」

あかり「やった〜。」

だが、この平穏な日々は長くは続かなかった。

この数日後、あぐり姉さんは、とある研究所の爆破に巻き込まれて死んだ。

そして、僕たちは、あぐり姉を殺した犯人と研究所にいたあぐり姉元婚約者に復讐する事を決意した。

## 2話

この人(？)って本当に教師か？

渚 side

僕たちは、いつも通り朝のニュースを見ていた。そのニュースの女性キャスターが、「突然ですが、臨時ニュースです。つい先程、月が7割型消滅したとの情報が入りました。」

これを見て、僕たちは犯人が誰なのかわかった。

そう、あぐり姉を殺した奴で、今回のターゲットだ。

そして、僕たちは復讐心を燃やした。

\*

僕たちはその復讐心を演技で隠し、家を出た。

あかり「ねえ、渚。学校では、他人のフリして過ごさない？」

渚「別にいいよ。転校して直ぐなのに、こんな仲いいのはおかしいしね。」

あかり「そうゆる事。それと、学校では、雪村あかりじゃなくて、茅野カエデだから。」  
渚「わかった。それじゃあ、先行ってるね。」

あかり「また後でね。」

と言つて、僕は先に学校（隔離校舎）に着いた。

校舎に入り、教室へ向かう。

教室は物音一つもしなかったが、殆どの生徒が揃っていた。

誰が誰かなんて僕は興味なかった。

だが皆1つだけ共通点があつた。

それは、

皆が暗く、絶望した表情で俯いて机の上だけを見つめていると

いう事だ。

多分、この隔離校舎、この教室、この席に座った瞬間、いや、移行通知をもらった時から自分は落ちこぼれなんだと実感しているのだろう。

まあ、僕やあかりはそんな事はないけどね。だが、僕らもそういう演技をする。

\*

廊下から『クニヤグニヤ』という変な音と『コツコツ』と複数の革靴の音が響いてくる。

ガラガラ

「はじめまして。私が月をやった犯人です。」

渚・茅以外「二……はっ?」

渚・茅「やつときたね、この人殺し。」

僕ら以外は目が点になっていた。

「来年には地球もやる予定です。君たちの担任になったので、どうぞヨロシク」

渚・茅以外「(……)まず5、6箇所突っ込ませろ!!!」↑ズーン、と教室の空気が沈んだ。

それ以降、黄色い触手は喋らずに、触手を動かしていた。そして、黄色い触手の代わりに(と言ってはなんだが)となりにいた男の人(僕の師匠)が話し始めた。

「…あー、防衛省の鳥間という者だ。まず此処からの話は国家機密だという事をキチンと理解していただきたい。」

渚)これは僕らにあの人殺しを殺してほしいから来たのかな?

鳥間「単刀直入にいう——君たちに、この怪物を殺してほしい」

渚)やった、当たった。このタコに復讐できるし、このタコを殺したことによって僕らの裏での知名度も上がるって訳で、一石二鳥だ。

烏間「詳しい事を言えなくてすまない。だが、コイツの言ったことは真実だ。来年の3月に地球をも破壊する。後、此れは国からの正式な依頼だ。その為、報酬もキチンと出る」

「ほ、報酬ですか?」

誰かが質問した。

烏間「成功報酬は100億円、国が全て支払う。」

クラス全員「二二なつ、ひゃ、百億円!!!」

烏間「当然だ。この暗殺が成功すれば地球は救われる、それを考えれば妥当な額だろう?」

師匠は『何でそんなに驚く』と言いたげな顔で、そう言った。

まあ、僕らにとつて100億なんて想像出来るわけがない。

僕のやあかりの最高年取でも2億だったから、その50倍。僕らでも想像できないが、あのタコを殺せるならなんでもやってやる。

そして、学校からのプリントを配るような感じで僕たちにあの触手には効く武器と弾が配られた。

これから、ナイフとか手慣れてないような演技をしなきゃね

それと、弱点メモでも作りますか。公開する方と僕たちだけの方と。

### 3話 先生、ド怒りの時間

キーン コーン カーン コーン

チャイムが鳴ったと同時に先生が教室に入ってきた。

「起立、気をつけ、れーい」

礼と同時に教室に銃声が響き渡った。

タコ「撃ったままでいいので出席をとります。磯貝くん……」

出席を取り終わると先生は

「今日も命中弾は0でしたね。殺せるといいですね、卒業までに。ヌルフッフッフ」

と僕たちを煽る様に言ってきた

1 限目 4 限目 今迄の復習とクラス内の実力判断テスト

く 国語く

タコ「一年生の復習です。『こうけん』を渚くん、『じょうちよ』を磯貝くん、『こくもつ』を茅野さん、『ゆいいつ』を奥田さんが、それぞれの漢字を書いてください。」

タコ) さつきからタコってなんですか? タコって? 私はタコではありませんよ!?! せめて、先生にしてください。

作者) 仕方ないですね。先生と表記することにしてあげますか。それと、メタ発言禁止です。

先生) わかりました。仕方なくって、先生傷つきます。それに、なぜ上から目線何ですか?

作者) 何となくです。それと、本編から外れてごめんなさい。それでは、どうぞ。

渚【貢献】

磯貝【情緒】

茅野【穀物】

奥田【佳一】

先生「渚くん、磯貝くんは合っています。」

先生はそう言って、顔を明るい朱色にした。

先生「茅野さん、『こくもつ』の『こく』は、『穀』ではなく、『穀』です。奥田さん、『ゆいいつ』の『ゆい』は、『佳』ではなく、『唯』です。2人とも、惜しかったですね。」

そう言って、次は顔を暗い紫色にした。

先生の皮膚ってどうなっているのか、興味あるなあ。

残りの時間は、クラス内の実力判断テストを受けた。

〈数学〉

先生「2年生の数学の復習です。〔 $3x + 2 + 4x - 3$ 〕を千葉くん、〔 $3x + 4y + 1$ 〕 + (  $2x - y + 4$  ) を速水さんが解いてください。」

千葉〔 $7x - 1$ 〕      速水〔 $5x + 3y + 5$ 〕

先生「2人とも正解です。速水さん、引っかりませんでしたね。」  
 そう言つて、顔を明るい朱色をした。

・      ・  
 ・      ・

というように、1限目から4限目までは主要5教科の復習とクラス内の実力判断テストをした。

\*

〈昼休み〉

寺坂くんに呼ばれて、僕は校舎裏に来ている。

いつも通り、寺坂くんの両脇には村松くと吉田くんが居た。



寺坂くんは、何か悪いことを考えている様な笑みをしていた。

寺「機嫌によって顔の色が変わるやつちやんと調べて来たか？」

何、上から目線でもの言ってるのかなあ？ああく、めんどく。だが、僕はこの感情を表に出さない様にして寺坂くんの問いに答えた。

渚「う、うん。舐めているときの顔は緑のシマシマになるのは知ってるよね？他にも……」

寺「俺は知らなくていいんだよ。」

は？何言ってるの、コイツ。殺っていいかな？（黒い笑み）お前が聞いたから、律儀に答えてやったんだけど、まあ、いいや。

寺「作戦がある。あのタコが一番油断してる顔の時に、お前が殺りに行け」

『殺りに行け』か。楽しみだなあく。プランは考えてある。

寺「嫌、なんて言わねーよなー。お前も俺らも抜けだすんだよ、この状況から。例えば、どんな手を使ってでもな。……しくじんなよ、渚くん。」

そう言っつて、寺坂くんは、僕に小さな袋を渡して教室に戻っていった。中身を見ると、やはり手榴弾だった。

後は、このプランを成功させるだけだ。

ピューー ドカーン

後ろを振り返ると、先生が片手（？）にミサイルを持って立っていた。

僕は、ミサイルをどう処分するのか少し気になった。

そんな事を考えていると先生が、

「教室に戻りましょう、渚くん。5時間目を始めますよ。」

といい、教室に向かっていった。僕も、すぐに先生の背中を追う。

## 5時間目

### 国語の時間

「では、お題に沿って短歌を作ってみましょう。ラスト7文字を『触手なりけり』でしめてください。

周りからざわめきが始まる。そりやそうだろう。この世のどこに触手について短歌を詠む人が居るんだ。

「書けた人から先生の所に持って来なさい。チェックするのは、文法の正しさと触手を美しく表現できたか」

そういったあとに先生は例文を詠み上げた。それに、出来るまで帰っては行けないと  
いった。こつちにしては、好都合だ。

先生は、教卓の横の椅子に座って薄ピンクの顔をしている。今がチャンスだ。

そう言った後、自分の席から立ち先生のところに行く。持っているのは対先生用ナイフと、寺坂くんから渡された手榴弾。

最初にナイフで襲って、その後抱きつく。というプランを再度確認した。

今回だけは、失敗してもいいか。出来るだけ早く終わらせようつと。

そう思いながら、書き終わった俳句に裏に対先生用ナイフを隠し、先生の前でナイフを取り出しそれをふりかざし、失敗した後に先生に抱きついて手榴弾を外す。勿論、先生にバレないようにね。外したらすぐに先生から離れる。

バーン

寺「よっしやー、100億いただきー。」

茅「ちよつと、渚に何持たせたのよ!?!?」

寺「おもちゃの手榴弾だが、火薬で威力を上げてある。∴人間が死ぬような威力じゃねえよ。それに、100億で治療費くらい出してやるよ。」

渚「∴ゴメンだけど治療費は要らない。」

茅「渚∴大丈夫?」

渚「うん、大丈夫だよ。心配かけてごめんね。」

寺「つな、あれだけの威力の手榴弾を受けて無傷だと！ありえねえ！！？」

本当だったら、そうだろうね。けど、私は殺し屋。死なないようにする鍛えてるし、反  
射神経や、危機察知能力だって高いほうだ。

それに、手榴弾を覆っているのは、

殺「実は先生、月に1度ほど脱皮をします。つまり、月1で使える先生の奥の手です。」  
声がある方を見れば、先生は、触手を広げて天井に張り付いていた。だが、先生の顔  
色は、真つ黒になっていた。

殺「寺坂、吉田、村松。首謀者は、君たちだな。」

寺「い、いや。渚が勝手に」

ゴトツ、パタツ……

音がした方を見ると、『寺坂』、『吉田』、『村松』と書いてある表札が落ちていた。

殺「政府との契約ですから、先生は決して君たちに危害を加えないが、次また今の方  
法で暗殺に来たら君たち以外に何をするかわかりませんよ。家族や友人……いや、君た  
ち以外を地球ごと消しますかねえ。」

5秒間で「地球の何処に居ても逃げられない」と。どうしても逃げなければ、この先  
生を殺すしかない。

茅「殺せない先生……殺せんせーは？」

と言い、先生の名前は『殺せんせー』となった。

授業とHRが終わると、僕は、自分の家の表札があるか確認しに行った。『潮田』も、『雪村』も無かったので、少し安心して家に帰った。

## 4話 日常の時間

次の日

p i p i p i

p i p i p i

p i p i p i

カチャ

A M 7 :

00

渚「う、うん。」

もう朝か。学校行かないとな。それより、あかりを起こしに行かないと。

コンコン

ガチャ

ユサユサ

渚「あかり、起きて。先にリビングに行ってるからね。」

あか「わかつた。」

テクテクテク

渚「おはよう、お父さん。あかりはもう少ししたら起きてくるよ。」

秋「おはよう、渚。明日の仕事についてだが、今回はちよつと手強い。何だったら、

シユウをスケツトに入れるが？」

渚「わかつた。あかりと相談してみるよ。」

学秀と一緒に仕事したいな。

秋「それより、朝ごはん早く食べないと遅刻するぞ。」

あか・渚「はくい。」

あかり、いつの間に居たんだろう？まあ、良いか。

あか・渚「ごちそうさまでした。」

僕たちは朝ごはんを食べた後、制服に着替えて家を出る。

あか・渚「行つてきまーす。」

学校では、何故か杉野がすぐ落ち込んで居た。

なんでも、暗殺に失敗したらしい。まあ、どうでも良いけど。

そのせいで、授業中の今でも杉野の周辺の空気が重たい。

そんな事を考えていると、殺せんせーが、後ろの方へ視線を向ける。そして、視線を向けた先に触手を向かわせる。

「!?」

殺「菅谷くん、惜しいですね。先生はもつとシュツとしたかおですよ。」

そう言つて、赤ペンで菅谷くんの書いた落書き（?）を修正したものをみんなに見せる。

「「ど」がだよー」」

殺せんせーはニューヨークに行つてスポーツ観戦をするためにいつもよりも早く帰つて行つた。

その後すぐ、防衛省の鳥間師匠さんが来た。

鳥間師匠さんは、「奴を殺せるような糸口は掴めそうか?」と聞いてきた。そのしゅんかん、クラスの空気が重くなつた。

糸口、か。はつきり言つと、僕はもう少しで掴めそうだ。殺せんせーを観察してれば大体の事は見えてくるからね。だが、周りは違う。皆も先生を暗殺しようと頑張つてはいるものの、今の環境を何処かで楽しく感じている部分がある。

誰もが言葉に詰まっている時に、狭間さんが口を開いた。



狭「ていうか、私たちE組だしー。」

磯「無理ですよ、烏間さん。」

と磯貝が言った後に、周りも「無理だ。」と烏間さんに告げた。

烏「ああ、そうだな。どんな軍隊でも不可能だ。だが、君たちだけはチャンスがある。」  
確かにね。だって、こんな近距離で暗殺できるのは僕たちだけだもんね。

「えっ」

えっ、そこ驚く所!?

「奴は何故か。君たちの教師だけは欠かさないんだ。放っておけば、来年3月に地球は爆破される。削り取られた月を見ればわかるように、その時、人類は1人たりとも助からない。奴を生かしておくには余りにも危険すぎる。この教室が、奴を殺せる唯一の場所なんだ。」

そうだ、此処はあの超<sup>殺せんせ</sup>生物を殺せる唯一の場所だ。

そして、僕たちには、超<sup>殺せんせ</sup>生物を1番近くで殺せるというチャンスが与えられている。

だが、僕たちも分からないことが多すぎる。

何故、地球を破壊させるのか。何故、僕らの担任をするのか。など理解不能な事が多すぎる。

\*

（次の日）

学校に来たら、杉野が昨日とは裏腹にスッキリしたような顔をしていた。なんでも、殺せんせーに、いいアドバイスをもらったらしい。

そんな事があつたが、今日もいつも通り終わっていった。

---

渚 side

皆は僕らが偽りの仮面を外した時、皆はどう思うんだろう？

騙されたと言つて、僕らを仲間と思わなくなるだろうか。——それはそれでいいと思  
う。

すごいと言って、もつと懐かれるのだろうか。——  
ないのにこれ以上懐かれるとか吐き気してくるわ。

それともいつも通りに接して来るのだろうか。  
と思われないほうが、楽だわ。

まあ、元々仲間と思っけないけど。

正体をバラすまで後〇〇日

それは嫌だ。今でもウザくて仕方

—— 1番厄介だなあ。それなら、仲間

## 5話 ハンデイキヤップの時間

いつもの休み時間。

殺せんせーは裏庭でかき氷を作っていた。

氷は、北極から仕入れて来たらしい。

そこを狙う磯貝くん、前原くん、三村くん、岡野さん、片岡さんは、忍ばせたナイフを確認した後目で合図を送りあった。

「「「「殺せんせー！俺ら（私たち）にもそのカキ氷、食わせて（食べさせて）くれよ（よ）」」」」

殺せんせーは、生徒たちが心を開いてくれたことを嬉しく思い、涙ぐんでいる。

だが、その瞬間彼らは殺気立って、ナイフを取り出し一斉に飛びかかった。

殺せんせーは、それをわかっていたかの様に派手に風を巻き上げて移動した。

殺「笑顔が少々ワザとらしい。こんな危ないものは置いといて、花でも愛でて、いい笑顔から学んで下さい。」

そして、ナイフを持っていた手には、綺麗なチューリップの花があった。

その花を見た片岡さんは声を荒げて、

片「☒ってというか、殺せんせー!!?この花クラスの皆で育てた花じゃないですか?」  
 花壇を見ると、そこには無数のクレーターがあり、綺麗に咲いていたはずのチユ?」  
 リップはなくなっていた。

殺せんせーは、案の定、クラスの女子たちから非難を受けていた。  
 お詫びにとマツハで新しい球根を植えていた。

僕は、『先生は、格好つけるとボロが出る』とメモをした。

茅「渚!どうしたの?」

渚「先生の弱点とか、癖とかを書き留めてたんだ。家に帰ってから見直そうと思って  
 ね。」

茅「家で詳しく教えてね。」ボソツ

そんなことを話していると、杉野がメモを取った。

ページを捲っていく程、杉野の顔が苦くなっていく。そりやそうだろう、コッチには、  
 大まかな事しか書いてないからね。大事な情報をまとめてある方を、クラスメイトで  
 あつても簡単に見せるわけじゃないじゃないか。茅野は別だけどね。だって家族だし。

そんなことをしていると、とても嬉しそうな顔をした磯貝くんがこちらに駆け寄ってきた。

磯「殺せんせーが、チューリップのお詫びにハンディキャップ暗殺大会させてくれるんだってさ！おまえらも校舎から武器持ってこいよー。」

そう言つて、磯貝くんは走つて行つてしまった。杉野は、それを聞いた途端に、校舎の中に、武器を取りに行つた。

茅野は、本性を見せない程度に殺つてくる、と行つて杉野と一緒に武器を取りに行つた。

僕は、殺せんせーを観察するべく、殺せんせーのもとへ向かつた。

正直に言おう。木に吊るされていても、殺せんせーのスピードは余り落ちなかつた。

下から攻撃されるのを難なく避けていた。

それを詳しく観察するために見ていると、茅野が自家製の槍を持ってコツチに来て、島岡さん師匠が後ろにいた。

茅「どう？渚…」

渚「う、うん。皆は完全に舐められてる。…あかり、本気は出したらダメだよ。（ボソツ）」

茅「…うん、わかってる。」ボソッ

烏「クツ、これは最早、暗殺と呼べるのか…?」

だが、殺せんせーを弱点からすると、

渚「…格好つけるとボロが出る」

その瞬間、先生の吊るされていた木の枝が重さに耐えきれなくなり折れた。

一瞬沈黙した後、一気に慌て出した先生に生徒が次々に襲いかかる。

その時に、疑問になっていたことを烏間さんに問いかけた。

渚「そういえば、何故師匠はここに来たんですか?」

烏「ああ、俺も今日からここで教師をする事になった。よろしくな、2人とも。」

渚「これからもよろしくお願いします。…師匠、放課後に話したい事があるんだけど、

少しいい?」

烏「?…ああ、いいだろう。それではまた放課後に。」

茅「ナギ、話すの?」

渚「…うん、師匠だけにはね。」

茅「烏間先生は、絶対気づいてるよね。」

渚「…だよね。絶対私たちが言うの待ってるよ。だから言う」

茅「わかった。私も一緒にいく。」

渚「…ありがとう」

\*

く放課後く

茅「渚く、いこ。」

渚「うん。」

く職員室前く

今日は丁度殺せんせーが早く帰って行ったため、職員室には烏間<sup>師匠</sup>先生と私たちだけだった。その上、クラスメイトも今日は早めに帰って行ったので、校舎にいるのも私たち3人だけだった。

渚「…単刀直入だけど本題に入るね。…師匠は『ナギ』、『レッド』という2人の殺し屋を知ってるでしょ？」

烏「ああ、渚たちだろう。前々から感づいてはいたが、言うのは気が引けたからな。そ



れに、こう言うことは本人から聞いた方がいいと思つたからな」

渚「…ありがとう。師匠、私とあかりの関係のことと、私が女つてこと、過去のこと、頭が良いつてことはクラスメイトには言わないで欲しいんだけどいいかな？ 私たちが出来る範囲でだったら、仕事とか手伝うからさ。」

烏「いいだろう。それとクラスでは、俺のことを『師匠』と呼ぶのはやめてくれるか？」

渚「…わかつた。これで大体はOKだね。あかりからは何かある？」

茅「2つだけ。『烏間さん』つて呼ぶのと、いつも通り『烏間先生』つて呼ぶのとどっちにすれば良いのかな？」

烏「俺は、今日からここで教師をする事になったから、先生でいいんじゃないのか？」  
茅「わかつた。後もう1つ、また今まで通り稽古をつけてくれませんか？ そうじゃないと、体が鈍っちゃうんで。」

烏「ああ、いいだろう。君たちは、教え甲斐があるからな。」

茅「ありがとう、烏間先生。」

烏「それより渚、君はいつまで演技を続ける気なんだ？」

渚「…わからない。多分、人を信じれる様になるまでだと思う。どうせ、私を裏切るんだから、最初から私も信じないし、騙し続ける。そして、裏切られた時に私も皆を裏

切る。」

烏「そうか。何かあったら、俺にでも言ってくれ。無理はするなよ。それと俺のことは信じてくれているか？」

渚「…うん。師匠は、家族以外で心を開かれる人のうちの1人だから。」

烏「そうか、よかった。いつでも俺は渚の味方だからな。」

渚「…ありがとう」ニコツ

渚は、本物の笑顔で言った。

烏（か、可愛い。）

烏「ハツ、もうこんな時間だ。送っていくから、少し待っていてくれ。」

茅・渚「はい。」

茅（私、空気だった。ほとんど烏間さんと渚が喋ってるだけで、全然話してない！）

渚「…あかり、早く行こう。」

茅「うん。」

そのあと、烏間さんに家まで送ってもらった。

## 6話 素行不良生の時間

「1、2、3、4、…」

鳥「八方向から、ナイフを正しく振れるように！」

昨日から鳥間先生が体育の教師になった事で、体育の授業はナイフや銃などの訓練になった。

今は、基礎的なナイフの素振りをしている。僕ら的には、物凄くつまらない。

殺せんせーの授業は、いたって普通の授業だったが、スペックが違いすぎて評判はあまり良くなかった。だが、殺せんせーと鳥間先生の会話を聞いていると、殺せんせー的には評判は良かったらしい。

その言葉を聞いていた菅谷くんは、

菅「嘘つけよ、殺せんせー。身体能力が違いすぎるんだよ。」  
と、ツツコミを入れた。

その言葉を聞いた杉野が、

杉「体育はやっぱ人間の先生に教わりたいわ…」

と言ったら、殺せんせーの決定打になったのかすごく落ち込んでいた。意外と精神的

な所は弱いんだね。

烏「よし、授業を続けるぞ」

前「でもさあ、烏間先生。こんな訓練意味あるんすか？それに、堂々とターゲットのいる前でさ。」

疑問の声を上げたのは、前原くんだ。まあ、そりやそうだろう。堂々とターゲットのいる前で訓練をするなんて、手の内を晒しているようなものだからなあ。

けど、

渚（勉強も、暗殺も同じ事。基礎を身に付ける程役に立つ。

烏「勉強も、暗殺も同じ事だ。基礎は身に付ける程役立つ。…磯貝君、前原君、前へ」

烏「そのナイフを俺に当ててみる」

磯「エッ、いいんですか？」

前「二人掛かりで…？」

烏「そのナイフなら俺たち人間に怪我一つつけられない。掠りもすれば、今日の授業は終わりでいい。」

磯貝くんは、真っ先に烏間先生に飛びかかる。

それを烏間先生は、体を反転させて避ける。その次の、前原くんの攻撃も軽く受け流

していた。

烏「このように、多少の心得があれば素人2人のナイフは俺でも捌ける。…俺にも当てられないようでは、マッハ20で動くような怪物に当てられる確率は皆無に等しい。」「確かにそうだ。けれど、あの2人はこのクラスでも運動神経は良い方だ。

その2人が当てられずに、捌かれるほどのものなら、このクラスで殺せんせーにナイフを当てれる生徒はまず居ない。僕らを除いては。

烏「砂場を見る！ 奴は、今の行動の間に砂場に大坂城を作り、着替えて茶まで点てている」

何故そこまでする!?!?

烏「クラス全員が俺に当てられるようになれば、少なくとも暗殺の成功率は格段に上がる。ナイフや狙撃など、暗殺に必要な基礎の数々。体育の時間で、俺から教えさせて貰う。」

では、今日の授業はここまで。」

「「ありがとうございます」

今日の授業を見て、烏間先生師匠の人気は高まったようだ。

杉「6時間目、小テストか」

教室に戻る時に隣にいた杉野が嫌そうな感じで言った。

渚「体育で終わって欲しかったねー」

そう言つて前を向くと2年間同じクラスだった、『赤羽業』赤羽カルマが居た。

業「よお、渚くん。久しぶり」

カルマ君は、暴力行為を繰り返して停学になっていた。

渚「…カルマ君、帰ってきたんだ。」

僕の言葉に、カルマ君はニツコリと笑つた。

私は、カルマ君：いや、赤羽君が嫌いだ。いつも、私の裏を探ってくるから。私に関わらないで欲しいのに。

けど、そんな表情や態度、雰囲気を出さずに、貧弱そうな演技をする。

僕らの後ろの方を見て、楽しそうな、けど驚いたように目を見開き、僕らの間を通つていった。

「へえ、あれが噂の殺せんせー？すっげ、ほんとにタコみたいだ。」

笑いながら近寄るカルマ君は、殺せんせーに遅刻をしたことで怒られていた。だが、カルマ君は、適当に謝つて、よろしく、と手を差し出した。

殺せんせーもこちらこそ、と言つて触手を差し出す。カルマ君の手と、殺せんせーの触手が触れた途端

ブシヤツ

殺「っ ！！？」

業「あははっ」

驚く殺せんせーの隙を逃さずナイフで襲い掛かる。

そのナイフを避けた先生は、冷や汗を流していた。

業「へえ？本当に速いし、本当に効くんだこのナイフ」

カルマ君の手には対先生用ナイフを小さく切ったものが貼ってあった。

業「けどさあ、先生。こんな単純な手に引つかかるとか、しかもそんなとこまで飛び退くなんて、ビビりすぎじゃね？殺せないから、殺せんせーって聞いたんだけど…もしかして先生ちよろい人？」

先生は、イラついたようで、見る見るうちに先生の顔が真っ赤に染まっていった。いつの間にか隣に来ていた茅野が聞いてくる。

茅「ねえ、渚。カルマ君ってどんな人なの？」

渚「…1、2年が同じクラスだったんだけど、2年の時に、暴力行為を繰り返したせいで停学になって…。このE組に落とされたんだ。でも、今この場じや優等生かもしれない。」

茅「どういう事？」

渚「多分、凶器とか騙しうちなら、カルマ君が群を抜いているはず。」

僕たちを除いては、ね。

そんなことを言っている間、カルマ君は、ナイフを楽しそうに回していた。



## 7話 素行不良生の時間 part 2

〜6時間目 小テスト〜

プニョン プニョン……

カルマ君の騙しうちに会いおちこんでいる殺せんせーは、触手で壁パンしている。だが、触手が柔らかすぎて壁にダメージが伝わっていない。

遂に痺れを切らした岡野さんが、

岡「ああ、もう!!!プニョンプニョン五月蠅いよ!!小テスト中でしょ!?!」

殺「こ、これは失礼!!」

やつと静かになったと思ったら、次は後ろから寺坂とその取り巻きたちが、喋りだした。

寺「よおカルマ。大丈夫かあ?あのバケモン怒らせちまってよ」

吉「どーなつても知らねーぞ」

村「またお家に籠つてた方がいいんじゃない?」

挑発するような言い方で言った。それに対して、カルマ君は、

業「殺されそうになつたら怒るの当たり前じゃん寺坂あ。しくじつてちびっちゃった

誰かさんの時とは違つてさ」

寺「つ!!ちびつてねーよ。テメエ喧嘩うってんのか!!?」

殺「こら、そこ。テスト中に大きな音を立てない。」

先生が言うか? さつきまでテスト妨害してたん誰だよ!

そんな賑やかな教室を見て良いなあと思つた。前までこんなんじや無かつたから。

…こんなんじや無かつたつて? それじゃあ、どんなだつたの?

そんな事を考えていたら思い出さないようにしていた記憶を思い出した。母親からの暴力、自分以外の学校生徒からのいじめ、暴力…… e t c

### 5歳の時

母「もし、男の子だったらこの服が絶対似合うわね。…こつちも捨て難いわ。それより、早く髪の毛切つていいかしら? そうじや無いと、この服も、この服も全部似合わなくなつちゃうじや無い。」

渚「い、いや。これだけは絶対にいや。やめて、やめて……」

母「何で、親の言う事を聞かないのかしら。男の子だったら良かったのに。女の子なんて要らないわ。」

そう言つて、母は、私に暴力を振るつた。その数日後に母親に捨てられた。

小3〜6の時

生徒1 「芸能人だからつて、調子乗んなよ。」

生徒2 「完璧過ぎて気持ち悪いんだけど」

生徒3 「人前でオドオドしてるとか、マジなんなの？芸能界に居て、人見知り？マジ笑える。」

生徒4 「

そう言つて、暴力を振るわれた。幸い、腕や脚などの見える部分にはやられなかった。そのお陰で、仕事に支障はきたさなかった。

クラス内では無視されて、教科書やノートなどは破られたり、落書きされたり。先生がいなくなつた途端、クラス全員で暴力を私に振るう。掃除の時に、いつも机が直されてないのなんて当たり前。

虐められている事は家族や幼馴染にも話さなかった。聞かれたとしても、嘘や演技で受け流した。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い  
 やめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめて  
 いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや  
 ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

息が苦しい。頭が痛い。誰か、たすけて、たすけて、たすけて、たすけて

カエデ side

寺坂くんとカルマ君が言い合っている。やっぱり賑やかで楽しい方が良いなあ。そう思っていたら、隣から、

渚「…痛い。や、めて。ごめん、な、さい。…はあっ…ひゅーっ…ひゅっ…うっ…い、やつ…ひゅっ…かはっ…ひゅっ…!!?はーっはーっ」

茅「渚、大丈夫。ゆっくり息をして。」

渚「ひゅっ…はあっ…がはっ…ひゅっ…うっ」

茅「…私じゃダメか。先生、烏間先生呼んできて。」

殺「は、はい、わかりました。」

「へ?どうかしたの?」 「な、渚?」

私の声を聞いて皆がこつちを向いた。

殺「茅野さん、烏間先生を呼んできました。」

烏「渚…くん、大丈夫か?」

皆「なんだ?今の間は。」

茅「ありがとうございます。烏間さん、いつもみたいによろしく」

烏「ああ、わかった。」

クラス全員茅野渚以外（大丈夫かな、渚。）

烏「渚、俺の呼吸と合わせろ」

そう言つて、通常よりも遅い速度で呼吸をした。それに合わせて、渚も呼吸をする。

やつと渚の呼吸が安定したら、プツンと何かが切れるように意識を飛ばした。

烏「無茶はするなと言つたのにな。それじゃあ、俺は秋斗さんに電話してくる。」

そう言つて、渚の頭を撫でる。

茅「お願い。私は、皆にこの事を説明した後に渚の荷物を持っていくから。」

私は、そう言つた後皆に説明した。渚が何故過呼吸を起こしたか、どうしてそれをす



茅「うん、じゃあね。」ピッ

ガラガラ

茅「渚のカバン持ってきたよー。」

烏「ありがとう。それと俺が、渚を家まで送っていく事になった。あかりも乗っていいか？」

茅「うん、お願い。お義父さんはどうだつて？」

烏「今日は早めに帰る。それと、今回はナギの代わりにシユウと一緒にしなさい、と言っていた。あかりも無理はするなよ。」

茅「わかった。ありがとう。」

烏「俺は、渚を連れていくから、荷物を頼めるか？」  
茅「わかった。」

その後、烏間先生の車に乗って家まで送ってもらった。  
家に帰ってから、渚は目を覚ました。

## 8話 ハニトラの達人の時間

皆からの質問の嵐が終わったある日

鳥「あー、今日から来た、外国語の臨時教師を紹介する。」

イ「イリーナ・イエラヴィツチと申します。皆さんよろしく。」

そういつて、イリーナは自己紹介をした。それも、仕事の潜入モードで。

はあー、これからめんどくさくなるなあ。そんなことを思いながら、僕とあかりはため息をついた。

その頃周りとはというと、

「スツゲー美人」「何故、ベツタベツタなの?」「イラつとする」という声が聞こえた。

鳥「本格的な外国語に触れさせたいと学校からの意向だ。英語の半分は、彼女の受け持ちで文句はないな?」

殺「仕方ありませんねえ。」

ぼくは、この後の反応がどんなものなのか少し気になっていた。超生物の殺せんせーが、女の人にベタバタされた時の独特な反応が。まあ、相手は、ハニトラの達人さんだけだね。



…普通にデレデレだ。先生には、ハニトラが効くのか？

イ「見れば見るほどすてきですわ。正露丸のようなつぶらな瞳、曖昧な関節。私、虜になつてしまひそう。」

先生もバカだなあ。そこがツボな女なんていないのによく騙されるもんだ。もしかして、先生は、騙されやすい体質か？…それだったら、色々なプランが使える。イリーナ、今回はありがとう。

\*

イ「色々と接近の手段は用意してあつたけど、まさか色仕掛けが効くなんて思わなかつたわ。」

渚「・・・そうだね、イリーナ。」

イ「わつ!!…つてその声、もしかしてナギさんですか？」

ナギ「・・・そうだよ。久しぶりだね、イリーナ。」

茅野  
レツド「ひさしぶり、イリーナ。」

イ「レツドさんも。お久しぶりです。」

ナギ「・・・あのタコの弱点教えてあげるからちよつと来て。」

そういつて、イリーナに弱点を教えた。交換条件を付けてね。

交換条件は、

- ・ 私たちの関係をクラスメイトと殺せんせーに絶対に言わないこと。
- ・ 私とあかりが殺し屋だつて言わないこと。
- ・ クラスメイトがいる前では私のことは『ナギ』、あかりのことは『レッド』つて呼ばないこと。

・ きちんと教師の仕事もやること。  
の4つだ。

イリーナは、交換条件をきちんとのんでくれたので、今の所わかつている弱点を全て教えた。

「もし破った場合はどうなるか分かつてるよね？」と脅h…注告しておいた。

\*

イリーナは、早速色仕掛けをしに殺せんせーのところに行つた。

何でも本場のベトナムコーヒーを飲んでみたくて英語を教えている間にかけてきて、と上目遣いをお願いしたらしい。

キーンコーンカーンコーン

磯「イリーナ、先生。そろそろ授業始まるし教室戻ります?」

イ「授業…? 師匠に頼まれたから仕方なくやってあげるわ。早く教室に戻りなさい。

…それと、ファーストネームで呼ぶのやめてくれる? イエラビッチ先生と呼びなさい。」

業「はい、ビッチ先生。」

イ「略すな!!」

\*

「ビッチ先生、ビッチ先生」

イ「あーもう。ビッチ、ビッチ嫌いわよ! まず、正確な発音が違う。日本人は、bとvの区別もつかないの?!? 正しいvの発音を教えてあげるわ! まず、歯で下唇を噛む。それで、発音してみなさい。」

「「ヴィ」」

イ「そうよ。きちんと発音を覚えておきなさい。これが次回までの宿題よ。次の授業の時にテストするから。」

イ「それと、私が教えるのは、外国人に会った時に絶対に役立つ実践的な会話術だけ。」

受験に必要な勉強なんて、あのタコに教わりなさい。」

殺「ありがとうございます、烏間先生。やはり生徒には、生の外国人と会話をさせてあげたい。世界中を渡り歩いた殺し屋などは、最適ですねー。……イリーナ先生、チャイをもつてきました。」

イ「ありがとうございます。」

キーン  
コーン  
カーン  
コーン

イ「これで授業は、終わりよ。」

「はー、発音のテストかー。誰か、教えてくれー。」

皆、英語の発音には自信がないように、誰かに助けを求めている。茅野はもちろん、渚に手伝ってもらうことにしたらしい。

こんな感じでイリーナは、この教室に馴染んでいった。

## 9話 毒薬の時間

奥「毒です。飲んでください。」

そう言ったのは、奥田さん。こうなったのは、ある日の授業の終わりだった。

\*

これは、『お菓子から着色料を取り出す実験』が終わった後だった。

殺「これで、お菓子から着色料を取り出す実験を終わります。…余ったお菓子は、先生が回収しておきます。」

「「ええー」」

片「なんで、地球を破壊する超生物が給料で暮らしてんのよ。」

そんな時、奥田さんが先生の前に行って

奥「あ、あの先生。…あの、毒です。飲んでください。」

と、ストレートに言った。そして、毒を先生の前に突き出した。

そして、その毒を先生は飲んだ。

殺「こ、これは……うん、ニユ」

そしたら、先生の顔にツノが生えた。

殺「この味は、水酸化ナトリウムですね。これは、先生には、効きません。…次に行きましょう。」

そう言つて、2本目を飲んだ。

殺「ニユニユ」

そうすると、次は、先生の顔に羽が生えて、無駄に豪華な顔になった。

殺「酢酸タリウムですね。これも先生には、効きません。…次が最後ですね。

そう言つて、最後の1本を飲んだ。

殺「ウオー、ウオー……ポン」

そうしたら、真顔になった。…変化の方向性が読めない。

殺「…これは、王水ですね。どれも、先生の表情を変える程度です。」ボソツ

殺「先生のことは嫌いでも、暗殺のことは嫌いにならないでください。」

と、急に変なことを言い出した。

殺「それとねえ、奥田さん。生徒1人で毒を作るのは安全管理上見過ごせません。…

この後時間があるのなら、一緒に先生を殺す毒薬を研究してみましよう。」

奥「は、はい」

茅「ターゲットと一緒に作る毒薬ねえ。」  
渚「明日、成果を聞いてみよう。」

\*

〈次の授業〉

イ「それじゃあ、フォニックス発音のテストをするわよ。内容は簡単、前に書いてある26個の単語を出席番号順に立って言いなさい。言う場所は、自分の席から。…それじゃあ、カルマから。」

業「apple、ボート、catch、dog……。」

イ「まあまあね。bの発言がきちんとできてなかったわ。」

・ ・ ・

イ「次、渚」

渚<sup>偉</sup>「apple、boat、cat<sup>大</sup>ch、dog<sup>な</sup>、elephant<sup>犬</sup>、fish<sup>象</sup>、  
great<sup>偉</sup>……」

渚は、全ての単語を完璧な発音で言った。

パチパチパチパチ

「「スゲ〜。発音良すぎ。」」

イ「完璧。」

渚「あ、ありがとうございます。」

イ「次、菅谷」

・  
・  
・

キーンコーンカーンコーンコーン

イ「これで授業は終わりよ。」

「「ありがとうございます。」」

杉「なあ、渚って意外と英語の発音良いんだな。」

渚「そんな事ないよ。」

そう言つて誤魔化しておいた。暗殺業で身に付けたなんて言えないからね。



業「ねえ、渚くん。あんな上手な発音いつのまに覚えたの？2年の時までそんな事なかつた筈なんだけど？」

いつもコレだ。普通に質問をしているようで僕の事を探るような質問をしてくる。けど僕は、本当の事を答える気は無いので適当に受け流す。

渚「偶にお父さんの知り合いの外国人が家に来るんだ。その時に、その外国人さんに日本語を教える代わりに、英語を教えてもらったんだよ。多分、そのおかげかな？」

嘘と真実を混ぜて言う。

それよりも早く話題変えないと。

渚「それより、もう放課後だから、奥田さんと殺せんせーが毒薬作りをしてるんじゃないのかな？ちよつと覗いていこうよ。」

杉「ああ」業「いいよー」茅「うん」

ガラッ

杉「ああ、やってる。それより、どんな毒薬作ってんだろうな？」

業「殺せんせーを殺せる毒薬ってどんなのだろうねー。」

渚「終わったのかな？それよりも先先生が渡してたあの紙なんなんだろ？」

茅「ねえ、皆。明日、どうなったか聞いてみようよ。どんな毒薬を作ったとか、あの紙はなんなのとかさ。」

渚「そうだね。今日はもう帰ろっか。」

「次の日」 キーンコーンカーンコーン

茅「で、先生にそれを持って来いって言われたんだ……」（中身は何なんだろう？）

渚「あの紙は、毒物の正しい保管方法が書いてあったんだ。」

ガラガラッ

殺「はい、皆さん。席についてください。」

奥「殺せんせー、これどうぞ。」

殺「では早速、いただきます。」

殺「ヌルッフッフ……」

奥田さん、ありがとうございます。

先生は、君のお陰で次のステージに進めそうです。」

茅・渚（絶対演技してるなあ。）

奥「それって、どういうことですか？」

殺「ニューヤーーーーー……ふう」

「「溶けたーーーーー」」

殺「君には、先生の細胞を活性化させて流動性を増す薬を作ってもらったのです。」

殺「液状故にどんな隙間にも入り込む事が可能になり、スピードはそのままに」

奥「騙したんですか？殺せんせー」

殺「奥田さん、暗殺には人を騙す国語力も必要ですよ。」

殺「今回のように、毒を馬鹿正直に渡しても、ターゲットに利用されるだけですよ。」

……渚くん。君が先生に毒を盛るなら、どうしますか？」

渚「うくん……甘い飲み物とかで毒を割るかな。」

殺「そう、上手な毒の盛り方、それに必要なのが国語です。」

殺「君の理科の才能は、将来きつと皆の役に立てれます。それを多くの人に伝えるた

めの国語力も鍛えてくださいね。」

茅・渚）暗殺以前の問題だなあ。

業「やっぱり皆、暗殺以前の問題だね。」

ムツ、赤羽と考えてる事が被った。なんか嫌。

まだまだ、先生の命に迫れる生徒は出そうに無いなあゝ  
早くしないとクラスでの暗殺ができなくなっちゃうよゝ。

## 10話 全校集会の時間

磯「急げ、遅れたらまたどんな嫌がらせされるかわかんねーぞ。」

岡「前は本校舎の花壇掃除だったつけ？」

前「あれはキツかった。花壇広過ぎるんだよ。」

岡「なんで私たちだけこんな思いしなきゃならないのくく!!!」

今日は、全校集会だ。

なので、僕たちE組は旧校舎から本校舎まで、山下りをしなければならぬ。フリーランニングで行った方が断然速いと思うが気にしないでおう。

それも、本校舎の生徒よりも早く整列していかないといけないという条件付きでだ。

僕ー潮田渚と茅野カエデは集会に参加したくないのが、本音だ。

その理由は、集会の後に会うある男子生徒に学校では会いたくないから。

そんな事を考えていると、いつの間にか本校舎の校庭に着いていた。途中、岡島くんが災難な目にあっていたが。

勿論、国家機密の殺せんせーは旧校舎に残ってもらって。ヴィッチ先生は、本校舎に着く頃には疲れ果てていた。…一応殺し屋なんだし、もうちよつと体力つけなよ。

磯「何とか間に合ったな。：ほら皆、急いで整列しようぜ」

そう言われて、体育館で整列した。

途中、声を掛けられることもあつたが無視した。

月に1度の全校集会でも、僕たちE組の差別待遇は変わらない。

僕らはそれに長々と耐える。

校長「えー、要するに君たちは全国から選りすぐられたエリートです。．．．」

と、長い長い校長のお話は右の耳から左の耳へ通り抜けていった。：聞こうとしなくても覚えてしまっているけど。

校長のお話の一言で周りが笑い出す。：黙つてよね。小学校で習わなかったのかな？ 集会は静かにしろつて。

そんなことを思っていると、後ろの菅谷君が

菅「渚、そういえばカルマは？」

と聞いてきた。

渚「サボリ。集会ふけて罰食らつても痛くも痒くも無いつてさ。」

僕も、サボればよかつたかも。学校では、学秀とは会いたくないし。

次は、生徒会からの発表らしい。…はあー。学秀が出てくる。アイコンタクトで、『待ってる』とか言われるんだろなあ。

おつ、鳥間先生が来た。他のクラスの先生たちに挨拶してるよ。やっぱり堅物だな。挨拶されてる先生、微妙に惚れてるし。

そんな時、中村さんと倉橋さんがナイフケースを取り出して見せ合っていた。鳥間先生は、『可愛いのはいいが、ここを出すな。他のクラスには秘密なんだぞー』と言って、注意していた。

その時、ヴィツチ先生も体育館に入つて来てE組の方を見ていた男子生徒や他の先生たちはヴィツチ先生に釘付けになった。…やっぱりイリーナは見栄っ張りだな。

そして、僕の方に来て小声で、

イ「…他の弱点も教えてください。ナギさん。」ボソツ

と、言つて来た。僕は、最初に決めた交換条件を破つたイリーナに教える訳は無く、渚「…何簡単に約束破つてくれてんのかな？殺されたいの？…まあ、約束破つたから弱点は教えないけど。」（黒い笑み）

と言つて、イリーナだけに殺気を放つた。

イ「ご、ごめんなさい」

渚「その代わり、今度もう1人の仲間を教えてあげる。まだ知らないでしょ？」

イ「ありがとうございます。」

いつの間にか、生徒会の発表準備が終わっていたようで、他のクラスの生徒たちは生徒会行事の紙を持っている。やはり、E組の分は無いようだ。

荒木「今配ったのが生徒会行事の詳細です。」

磯「すいません、E組の分まだなんですが」

荒木「あれー、おかしいな？ごめんなさい。E組の分忘れたみたい。すいませんが、全部記憶して帰ってください。それに、E組の人は、記憶力も鍛えた方がいいと思うし。」  
そう上から目線で荒木鉄平は言う。

記憶力を鍛えた方がいい、か。E組でも憶えられるんだったら他のクラスの生徒たちはもっと簡単に憶えられるはずだね。だったら、

「すいませんが、ちよつと見せてくれませんか？3秒でいいから。」と隣のクラスの1人に言う。OKだそうで、3秒だけ見せてもらった。よし、憶えた。

渚「生徒会行事の詳細について・・・」

と言つて、プリントの内容を言い始める。内容を全て言い終わる前に荒木くんが

荒木「な、何でそれを知っているんだい？」

壇上にいる荒木くんが驚きながら言う。

渚「えっ、記憶してつて言われたから隣の人に3秒だけ見せてもらった時に記憶した



ただけど？文句でもあった？それに、E組の僕でも暗記出来るんだから、当然他のクラスの人でも暗記出来るはずだよな？」

そう言うのと、周りが一気に静まった。あかりと学秀と烏間先生は呆れた顔でこつちを見ていた。

やり過ぎたかな？けど、あかりの事を悪く言ったようなものだから、見過ごせないしね。

そんなことを考えていると、プリントを渡された。手書きのようだ。こんな芸当が出るのは、殺せんせーだけだ。

殺「磯貝君、問題ないようですね。」

そんなこんながあったが、無事集会は終わった。

生徒会長からの話の時に、学秀にアイコンタクトで『やり過ぎだ。もう少し自重しろ。それと、集会の後、少し待ってろ。』と言われた(?)ので仕方なく体育館前の自動販売機で飲み物を買って待っていたら、

高田「おい渚。お前らさ、調子乗り過ぎじゃね？」

田中「集会中に笑ったりとかよ、ちよつとは周りの迷惑考えろ。」

高田「E組はE組らしく、下向いてろよ。」

田中「どうせ、人生詰んでんだからよ。」

はー、やつぱバカだコイツら。人生詰んでんのはお前らの方だつてこと気づいてないんだ。

学秀「潮田くん、ちよつといいかな?…この人たちは何をしているのかな?さっきのことで君たちよりも潮田くんの方が頭が良いと言うことがわからなかったのかな?」

(威圧)

高・田「す、すいませんでしたー。」

学「よし、行つたね。それじゃあ、ちよつといいかな?」

〈校舎裏〉

渚「・・・何の用、学秀?」

学「それは勿論、A組への勧誘さ。」

またか。

渚「・・・それは勿論断る。」

学「そうか。それじゃあ、今度のテストで本気を出してくれ。」

渚「・・・わかつたけど、全力じゃない。それと、あかりは正体バラしてないから本気出さない。」

学「よし、これで渚と張り合える。あかりは、仕方がない。…それじゃあ、今日の放課後勉強会しないか?あかりも誘つてな。」

渚「・・・別にいいよ。あかりには、私から伝えておく。場所とかは、メールで送って。それと、私とは張り合いにならないよ。」

学「ああ、わかった。それじゃあ、また放課後に」

学秀と話した後、旧校舎に戻った。

〈理事長室〉

endのE組が普通の生徒を返り討ちに（言葉でだが）して歩いていく。だが、それは私の学校では合理的ではない。少し改善する必要がある。だが、普通の生徒を押し退けて歩いて行くのは僕が気に入っている渚さんだ。改善するべきか悩みどころだ。

# 11話 中間テストの時間

キーンコーンカーン

殺「さて皆さん、始めましょう。

「「いや、何を!!」」

殺「中間テストが迫って来ましたので、高速強化テスト勉強を行います。」

殺「先生の分身が1人ずつマンツーマンでそれぞれの苦手科目を徹底的に復習していきます。」

今までの復習って、全部記憶している僕に必要無いじゃん。今回必要そうな記憶を引つ張りだして書き取りしよう。先生の言っていることはBGMだとも思つて。

ガヤガヤガヤガヤ カキカキカキカキ ペちやくちやペちやくちや

暇だったので、先生の分身にナイフを突き刺す。丁度、赤羽くんが左頬を僕が右頬を刺したので、両側の頬がいつぺんに歪んでいる。クラス全員がお前もかという目で僕の方を見ている。何でだろう？暇だったから暗殺してるだけなのに。

殺「2人とも、いきなり暗殺しないで下さい。他の分身にまで影響が出ます。」

業「へー、意外と繊細なんだーこの分身。」

渚「いきなりじやなきや暗殺になりません。」

その日の授業、僕は教室があまりにも煩くて集中出来なかったので、教員室に行つて勉強をした（ハーバード大学入試レベル）。

HRの後、茅野に今日学秀の家で五英傑の人たちと勉強会をする事を話しながら教室を出ると教員室のドアが開いていたので2人で覗いてみると、そこには、理事長が居た。何やら、殺せんせーと話をしているらしい。

理事長「まあ、余程のことがない限り私は暗殺にはノータッチです。十分な口止め料も頂いていますしね。」

烏「助かつてます。」

そう言った烏間先生は苦い顔をしていた。

イ「随分と割り切っておられるのね。嫌いじゃ無いわ、そういう男性。」

理事長は、ビッチ先生の言葉に「光栄です」と一言だけ述べた。

理事長「そうだ、殺せんせー。1秒以内に解いてください」

理事長は今思い出したかのように言い、知恵の輪を殺せんせーに投げた。

殺「えっ、いきなり ！？？」

殺せんせーの触手は、知恵の輪に絡みついていた。知恵の輪でテンパるんだ。意外。

理事長「噂どうりのスピードですね。でもね……世の中には、スピードで解決できない問題も有るんですよ。」

教員室のドアが開けられ、僕らは慌てて傍に隠れた。

理事長「ん？久しぶりだね、潮田くん、茅野さん。」

渚・茅「お久しぶりです、理事長。」

僕と茅野はペコリとお辞儀をした。

渚「理事長、ちよつとお願いがあつて……」

理事長「何だい？聞くだけ聞いてあげよう。」

少し興味深げな表情で見てくる。

渚「ありがとうございます。単刀直入に言います。ピアノをこの校舎に入れて欲しいんですけど可能ですか？」

理事長「ピアノ、か。いいだろう。そのかわり条件があるよ。それは、君のテストだけ問題の難易度を上げてその上で490点以上の点数を取る事だ。範囲は、東京大学入試レベルだ。」

渚「はい、ありがとうございます。」

くテスト前日く

殺「今日は更に頑張つて増えてみました。」

その言葉を聞いた途端、僕は教室を飛び出した。

昨日よりも煩くなるとかゴメンだし、教室に居たら理事長との賭けの為の勉強が出来ないからね。殺せんせーがなんか言ってるけど無視しよう。

ガラガラツ

渚「・・・失礼します。」

烏「はー、また来たのか（呆れ）。昨日も言ったが此処はサボリ場所じゃ無いんだぞ、渚。」

渚「・・・わかつてる。でも、教室煩いから集中出来ない。そうすると、理事長の賭けに勝てない。」

烏「はー。それで、理事長と何を賭けたんだ？」

渚「・・・ピアノ。条件は、東大入試レベルのテストを490点以上取ること。」

烏「そうか。確かに、あの煩さじゃ集中出来ないだろうな。仕方ないが、中間テストまでは此処で勉強していいぞ。」

渚「・・・ありがとう。」ニコツ（ダキツ）

烏（なんだ、この可愛い小動物は！）

カチカチカチカチ。パソコンの音  
カキカキカキカキ。何かを書く音

キーンコーンカーンコーン

渚「・・・1回教室戻る。」

ガラツ　ピシヤツ

く教室く

渚「茅野く、どうだった？」

茅野は、解らない問題があつたようで僕に聞いて来た。

茅「あつ渚、ココ教えて。」

それを、出来るだけ分かりやすく説明する。

渚「これは、ココをこうして解けばいいよ。」

茅「ありがとう。それで、理事長との賭けに勝てる自信はあるの？」

ありまくりで反対に間違えないか心配だなあ。

渚「勿論。そのために、クラス内でのテスト勉強の時間は教員室で勉強してるんだ

よ。」

茅「確かに。渚の場合、煩すぎると集中出来ないもんね。」

渚「そうゆう事」



業「渚くん、次の授業（テスト勉強）もサボるの？」

渚「まあ、そんなかんじかな。」

杉「テスト勉強しなくていいのかよ。まあ、渚は大丈夫そうな気がするけどさ。」

渚「きちんとテスト勉強はしてるよ。」

業「それより、さつき聞こえたんだけど、渚くん理事長と何か賭けてるんだって？」

何処でその情報を…って、さつき茅野と話してた内容を聞かれたのかな？

杉「それ、本当か!？」

そこまで驚くような事なのかな？あの人とは、何回も賭けをしてるからわかんないや。

渚「うん。ピアノをね。条件は、東大入試レベルのテストで490点以上取る事。」

業「ふーん、それで勝てる自信あんの？」

渚「勿論。ピアノの為なら何でも頑張る。」

キーンコーンカーンコーン

渚「それじゃあね。」

そう言つて教室を出て、教員室に行き、勉強を始めた。

つてそれよりなんで僕が頭良いこと軽々と話してんだろ!!????

わたs…僕って本当はバカ?!隠して意味ないじゃん。何やっつてんだらう（呆れ）

僕は悶えながらも勉強した。↑意外と器用？

カチカチカチカチ

カキカキカキカキ

キーンコーンカーンコーン

休み時間も僕は教員室で勉強していると片岡さんがイリーナを呼びに来た。

片「イリーナ先生ちよつと来てください。」

イ「ちよつと、何なのよ。渚も勉強してn……ヒツ」

僕は、勉強の邪魔をされそうになったので、イリーナに向けて殺気を放った。

渚「片岡さん、何かあったの？」

片「殺せんせーが、暗殺者について説教をするみたいで、全員外に出なさいって言われて、私はイリーナ先生を呼んだ来てって言われたから。」

それじゃあ、僕には関係なさそうだね。

渚「そうなんだ。片岡さん、僕此処で勉強してるから。」

片「いやいや、渚もだよ。」

はー、めんどいなあ。だが、腕を掴まれて引きずられてるから、行くしかないか。

校庭では、殺せんせーが、

殺「第2の刃を持たざる者は、暗殺者の資格なし。」

そうやって、竜巻を起こして校庭を綺麗にしていた。

『クラス全員50位以内』を取らなければ、殺せんせーは此処を出て行くらしい。

思うんだけど、それ僕に関係くない?!だって、皆と問題違うし。それより、僕の場合順位とかどうなるんだろう？

くテスト当日く

僕は、皆とは違う教室でテストをした。試験監督は、去年の僕の担任で今は3—Dの担任をして居る先生だ。

全教科スラスラと解いていった。

この学校は、テスト問題と解答用紙を一番最初に渡されるので、1つ目のテストが終わったら次のテストをしてもいい事になっている。

だから僕は、1限(50分)の間に2教科ずつ解いていき、見直しもする。3限目の半分からいしたところでテストは終わったので今頃皆が受けているであろう中間テストの問題を解いていた。

簡単すぎ。難しい問題を解いた後に簡単な問題を解くとすごく簡単に見えるみたいな？

数学は、凶悪な問マスターが魚に見えてきた。こんな事あるのか？

数学の最後の問題は、余計な部分が多すぎて面倒だったが何とか解いた。  
そんなかんじで中間テストが終わった。

# 12話

## テスト返しの時間

殺「……先生、この学校の仕組みを甘く見過ぎていたようです。君たちに顔向けできません。」

そういった先生に、僕と赤羽くんはナイフを投げる。

赤羽業総合4位で、皆の総合順位も上がっている。僕も本気でやったから、学秀を抜いて堂々と総合1位で全教科100点。賭けの方も全教科100点で賭けの条件をクリアした。

業「いいの？顔向けできなかったら、俺が殺しに来るのも見えないよ。」

渚「そうそう。範囲がちよっと変わっても関係ないし。それに、ピアノがかかっているからね。」

と言いつつ、テストの結果を見せる。

赤羽業

国語：98

数学：100

理科：99

社会：99

英語：9

8 総合4位

潮田渚

国語：100

数学：100

理科：100

社会：100

英語：

100

総合1位

「渚が浅野を追い越した。」

「数学の最後のあの問題が解けたのか?!」

「渚はどこまで実力隠してたんだよ。」

クラス全員が驚いている。

業「俺の成績に合わせて先生が余計なトコまで教えたからだよ。」

渚「僕の場合は、元々大学の範囲までやってたからね。」

大学の範囲といってもハーバード大学入試レベルなのだが。

それともし、このクラスを出る時があれば、素性がバレた時だけ。その時は、A組に

いくかな？

業「でも、俺はココを出る気ないよ。ココの方があっちよりも絶対楽しいし。」

渚「そーそー、本校舎行っても仲良いのあいつぐらいだしね。」

( (あいつって誰だよ！) )

業「それでも、殺せんせーは出ていくの?」

渚「それって結局さ」

渚・業「殺されるのが怖いだけじゃないの?」

僕と赤羽くんが先生を挑発すると、クラス全員が挑発し始めた。

殺「ニユヤーー!!先生は逃げるのではありません。期末テストであいつらに倍返しです!!」

殺「所で、渚くん。ピアノがかかっているというのはどういう事ですか？」

と聞かれたので、隠していたもう一つのテスト結果を出した。

殺「ここ、これは東大入試レベルの問題ではありませんか!!それも、全て満点です!!」  
皆は「へっ?!」といった表情でこつちを見てくる。

仕方がないので、理事長との賭けの条件を説明した。

渚「もし、僕が東大入試レベルのテストで490点以上取る事が出来たら、ピアノをここに置いてもらえる事にしたんだ。」

「理事長に直接要求できる凶太さがすごいな」

「理事長に一泡吹かせた事にしておきましょう。」

くその頃本校舎ではく

「浅野くんが1位じゃないだ!!」

「何ですって!!」

「それじゃあ、誰が1位なんだ?」

「E組の潮田渚っていう奴らしいぜ。」

「あー、あの集会の時の奴か」

「俺（私）がE組に負けただと（ですって）?!」

（浅野学秀 side）

よし。やつと、渚が本気を出してくれた。やはり、渚には勝てなかつたか。だが、これで少しは楽しくなりそうだ。それに、これからは一緒に登校する事もできるかもしれない。

この頃、学秀の周りはやけにテンションが高い学秀にちよつと戸惑っていたのだつた。



## 13話 修学旅行迄の時間

学秀 side

学「ところで渚、来週の修学旅行どうするんだ？性別偽装して男って事にしてるんだらう。」

渚「そうだった。忘れてたよ、修学旅行の事とか考えてなかったよ。どうしよう」  
渚がちよつとキャラ崩壊しても可愛い。というより、修学旅行とかの泊りがけの事も考えとけよ。やっぱり渚は肝心なところで抜けてるな。

学「バラすのはダメなのか？」

渚「・・・ダメ。正体バレる。」

学「それじゃあ、休むか？」

渚「・・・休みたくない」

学「それじゃあ、どうするんだ。」

渚「・・・あかり、助けて。」

あかり「助けてって言われても…。もうバラしちやおうよ。正体は付けてるからそう簡単にはバレないよ。いざとなったら、私もいるし。」

渚「・・・わかった。いつかはバラす。けど、クラスの人にだけ。」

あかり「わかった。けど、そこまで信頼できるクラスだった？」

渚「・・・わかんない」

あかり「そつかく。信頼できるクラスだといいいね！」

そう言ったあかりは、こつちに來て「早くしないと取られちゃうよ。」と言つてきた。それはダメだ。何としても止めなければ。

そんな事を話していたら、もう登校時間になつてしまった。別に学年1位と2位が一緒にいてもおかしくはないだろうという事で、一緒に登校した。その所為で、教室に入つた途端色々質問された。：喋りすぎて疲れた。

けど、演技してるから多少は大丈夫。

片「渚、来週の修学旅行の班決まった？決まったら、私か磯貝くん伝えてね。」

皆からの質問が終わつた後に、片岡さんがそう言った。

：茅野とは一緒になろう。

渚「茅野、一緒の班になろう。」

そう言うと、茅野は「OK!」と言つた。残り4人。どうするかな。

そう考えていると、殺せんせーが、

殺「まったく、3年生も始まったばかりのこの時期に修学旅行とは、気乗りがしませ

ん。」

と舞子姿になりながら言っている。：意外と似合っているのがムカつく。

「ウキウキじゃねーか。」「舞子かよ!」「何故か、似合ってるよ!」

と前原くん、三村くん、岡島くんがツツコむ。

体育の時間鳥間先生に、京都の2泊3日の修学旅行でも暗殺だということ知らされた。なので、その為のコースを考えて欲しいとのこと。まあ、適当に頑張りますか。

渚「修学旅行の班か。：カルマ君、同じ班になんない?」

業「ん、OK」

赤羽君なら多分大丈夫だよな。

杉「えー、大丈夫かよ。旅先で喧嘩売って問題になつたりしねーよな。」

そこら辺は考えてなかった。

業「へーきへーき。表沙汰にならないように目撃者の口も塞いであるから。」

そう言っているカルマ君から悪魔の尻尾と角が生えている。

へー、僕なら目撃者は殺しちゃうけどなあ。

杉「おい、アイツ誘うのやめとこうぜ。」

渚「うーん、けど一番気心知れてるし：」

表では、ね。

業「それで、メンツは？」

渚「僕と茅野と杉野：茅「後、奥田さんも誘った！」：だよ。」

業「6人班だから、後1人女子いるんじゃないね？」

本当だったら、女子1人じゃなくて、男子1人なんだけどね。

それを聞いた杉野は

杉「実はこの時の為にだいぶ前から誘っていた：クラスのマドンナ、神崎さんでどうでしょう。」

茅「おく、異議なし。」

マジか。これは、徹底的に演技しないと素性がバレそう。

神「よろしくね、渚君。」

茅「よし、どこを回るか早速決めちやおう！」

茅野がそう言つて回る場所を決めていると、

イ「ふ、ガキね。世界中を飛び回った私には旅行なんて今更だわ。」

それを聞いた皆は、

前「じゃあ留守番しててよ。」 岡「花壇に水やつといて〜」

と言つた後、修学旅行の回る場所を決めていた。そうすると、

イ「何よ、私抜きで楽しそうな話してんじやないわよ。…」  
と逆ギレされた。やっぱり、イリーナはツンデレだ。

そんな事を聞いていると、殺せんせーが教室に入って来た。

殺「1人一冊です。」

と言つて、辞書のような修学旅行のしおりを渡された。

お土産人気トップ100、旅の護身術入門から応用までと要りそうなものと要らなさ  
そうなものがこのしおりには書いてあるらしい。修学旅行までには読み終われるかな  
？

3—Eは暗殺教室。普通よりも盛り沢山になるであろう修学旅行に僕は、楽しみなが  
らも悩んでいた。

お風呂とか、寝る場所とか色々と、ね。

## 14話 修学旅行の1日目

茅「渚く、変装道具一式と着替えと薬、全部持った？」

渚「・・・全部持った。忘れ物無し。」

薬、か。赤羽君の停学が明けた日に丁度発作を起こしてからいつもカバンの中に入れている、精神安定剤だ。（瞬間記憶能力者だと、忘れることができないからトラウマになりやすい。）・・・出来るだけ飲まないようにしたい。

茅「それじゃあ、行こっか。」

今日から、二泊三日の修学旅行。・・・京都か。仕事で行った時ぶりだから行くのは3年ぶりぐらいになるのかな？京都行くの久しぶりだし、いっぱい楽しもう。

菅「うっわ、A組からD組までグリーン車だけ。」

中「ウチらだけ普通車。いつもの感じだね。」

D先生「入学時に説明したろう、ウチの学校はそういう校則だつて。」

モブA「ええ、学費の用途は成績優秀者に優先されます。」

モブB「おや、君たちからは貧乏の匂いがするね。」

へー、学費の用途は成績優秀者に優先されるんだ。それじゃあ、

渚「僕よりもバク……テストの点数圧倒的に低かったし権限使って退学にしてもいいよね？」

モブAとBは血相を変えて電車に駆け込んだ。やっぱりバカだね。

後ろを見ると、茅野がカメラで今の様子を撮っていた。他の皆は冷や汗をかいている。……そんなに怖かったかな？それより、茅野はその動画を誰に送るのかな？

その間に、イリーナは烏間先生に服装を注意されて着替えてた。wwww

新幹線に乗っている間は、殺せんせーが窓に張り付いていたり、皆の意外な一面が見られたりと色々あったとあかりに教えてもらった。何故僕が知らないのは、僕はあかりの肩にもたれながら寝ていたからだよ。

く京都く

A組くD組は高級ホテル、僕たちE組は古い旅館と此処でもクラス差別があった。

殺せんせーは、新幹線とバスで酔ってグロッキーになっていた。岡野さん達は心配しながらも、対先生用ナイフを殺せんせーに向けていた。

その頃僕は、お風呂とか寝る場所とかどうしようかと頭をフル回転させて（周りに気づかれないうちに）、仮病で誤魔化すことにした。

体調不良の演技なんて余裕だからね！元天才子役舐めんな！

いつ決行するとかは、茅野と一緒に決めよう。

く京都見物く

杉「渚、暗殺の場所此処ならいけそうだな」

渚「スナイパーの人から見えるかな？」

そうやって、表面上を取り繕う。こんな見えやすいところでスナイパーから見えないわけ無いじゃん。けど、いい場所かもしれない。下は川が流れてるしね！

茅「変な修学旅行になったね」

そう茅野が言う。確かに普通ならこんな事考えて修学旅行なんてしないもんね。

渚「確かにね。けど楽しいよ。」

茅「折角京都に来たんだから抹茶わらび餅とか食べたい！」

ほんと、茅野は甘い物に目がないなあ。そう思っていたら、奥田さんがビックリ発言をした。

奥「それに毒を入れるのは如何でしょう？殺せんせー、甘い物に目がないですから。」

それを聞いたカルマくんが

業「いいね、名物で毒殺」

それを聞いた茅野は、

茅「勿体ないよ、抹茶わらびが」

と言う。毒殺か、今度殺せんせーに効く毒を探してみようつと。



杉「修学旅行の日くらい、暗殺の事忘れたかったよな。いい景色じゃん。暗殺とは縁のない場所でき。」

そうでもない。京都はずっと国の中心だったから、暗殺の聖地でもある。

渚「そうでもないよ。・・・」

と説明しながら歩いた。

奥「次は、八坂神社ですね。」

それを聞いたカルマ君は、

業「ええ、もーいいから休もう。京都の甘ったるいコーヒー飲みたい。」

茅「飲もう飲もう！」

僕もカルマ君の意見に同情するけど、甘ったるいコーヒーは飲みたくない。

この後、カルマ君と茅野たちに便乗した奥田さんや神崎さんに連れていかれ甘ったるいコーヒーを飲まされそうになったり、高校生に誘拐されそうになったり、と色々あったが無事(?) 1日目の京都見物が終わった。